BAIEIDO-TSUSHIN

梅栄堂通信

Vol.44

'05 新春号

好文木

時代を超えて 愛される名香

おなじみ梅栄堂の好文木は、白檀、桂皮をはじめ、
選りすぐりの天然香料をふんだんに使い、梅栄堂秘伝の
調合により創り上げた高級お線香でございます。
おかげさまで、多くのお客様から長年にわたり
ご愛顧いただきありがとうございます。
香は大気を清め、心を安らげると言われます。
天然の香りだけが持つ上品な香り、静かな潤いを
これからもお楽しみいただきますよう、お願い申し上げます。

●標準小売価格　1,680円（本体価格　1,600円）

創業三百有余年
梅栄堂
〒590-0943　堺市東之町東1丁1番4号
TEL 072(229)4545(代)　FAX 072(227)1672
ホームページURL http://www.baieido.co.jp

迎春

明けましておめでとうございます。

梅栄堂社長　中田信浩

早いもので、私が社長に就任いたしまして、今年で五年目に入りました。その間経験不足もあったと思いますが、なんとか無事にやってこられましたのは、みなさまのお引き立てのおかげと思っております。

また一昨年、昨年と新しいタイプのお線香『残香飛』『一期香』を発売させていただきました。マスコミからもたいへん注目をいただき、おかげさまでご好評をいただきました。このお線香をきっかけに、梅栄堂のお線香を使っていただけるようになったお客様もいらっしゃいまして、たいへんありがたいことだと思っております。

とはいえ、梅栄堂といたしましては、基本はあくまで伝統を引き継ぎ、天然香料を使いました高級線香を中心にお届けさせていただきたいと考えておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

ご承知の通り、天然香料はたいへん希少でございます。沈香は高品質なものが少なくなりつつありますし、白檀は高値をよんでおりますので、いい香材を仕入れるのが難しくなってきております。おかげさまで梅栄堂といたしましては、長年の経験とお付き合いで、品質のよい天然香料を確保させていただいておりますので、それを生かして、より高品質のお線香をお届けできるよう伝統だけに甘えず、日々研究を重ねていきたいと思っております。

メーカーといたしましては、何より現場第一主義で、品質管理に重点をおいてまいりましたが、今後はそれに加えて、梅栄堂のお線香をより多くの方にも認知していただけるよう、社員一丸となって、いっそうの営業努力を心がけ、精進してまいりたいと思っておりますので、本年もどうぞよろしくお願いいたします。

四季彩々

歴史が生んだ桜の名所

吉野山の桜

"春は桜、桜は吉野"と昔から愛された吉野山の桜は、四月上旬から下旬までかけて、麓から尾根までをピンクに染め上げることで有名。春霞の中で山全体がほんのりと浮かび上がる優雅な景観は、まさに日本の春を代表する景色の一つと言えるでしょう。

現在吉野山を彩る桜は、約三百種、三万本。そのほとんどが『シロヤマザクラ』で、若葉と同時に淡いピンクの花が開きます。

全国の他の桜の名所と違い、吉野山の桜は元来、お花見のために植えられたものではなく、『信仰の桜』として、現在まで大切に保護されてきたものです。

歴史は約千三百年前（奈良時代）にさかのぼりますが、当時は、山々には神が宿ると信じられていました。のちに修験道の開祖と呼ばれるようになった役行者は吉野の山に入り、厳しい修行の末、民衆を救う神としての蔵王権現を感得し、その像を桜の木に彫ったといわれています。そしてそれを吉野山に祀ったことから、桜が神木として大切にされるようになったと伝えられています。以来、彼の信者たちが桜を植え続け、やがて桜の名所になりました。

吉野山といえば豊臣秀吉が、家康や茶人、連歌師など総勢五千人を伴い開いた『吉野の花見』が有名です。山に入ってからは、三日間も降り続いた長雨でしたが、秀吉の命令のもと、吉野全山の僧たちが晴天祈願を行い、翌日には一転晴れ上がり、豪華絢爛たる花見が催されたというエピソードも残っています。吉野山の桜は四月上旬に下千本から咲き始め、中千本、上千本、奥千本と順に山を這い上がるように咲き上げます。毎年この時期には数十万人の観光客で賑わいます。

- 開花期　四月上旬・中旬
- アクセス　近鉄吉野線吉野駅下車、ロープウェイで三分
- 問合せ先　吉野町役場文化観光商工課　TEL. 07463-2-3081

◀ジャングルの白檀木

白檀の聖地を訪ねて

バンガロール・マイソールへの旅

梅栄堂 営業本部長
中田 恭三朗

インドでは白檀を専門に盗む盗賊グループがある。中でもその中心グループの親分ベーラッパンは、南インドでは有名人で、すでに十数年にわたり警察・軍隊から逃げ回り、ジャングルの中で生活していた。貧しい村人にはお金を分け与え、現代版ロビンフッドとして慕われていたが、ついに最近、警察との戦闘で射殺されたと聞いた。

盆休みを利用して久しぶりに息子と南インドへ出かけた。白檀の状況調査の旅である。まずはバンガロールにある銀行の庭に白檀木を見に行く。しかし、残念ながら一ヶ月前に根本から切り倒され盗まれたと、直径約三〇cmはありそうな、残された根株を見せてくれる。最近は生産された白檀の半分以上が盗伐され、闇のルートで海外に持ち出されていると云われている。白檀の値段が高騰しているのも、こうしたことが一因であると思われる。

その後、国立の樹木科学研究所を訪問。白檀の植林事業について大変詳しい人から話を聞く事が出来た。本格的な植林事業で生産・出荷された白檀はまだ少なく実験段階である。木の伐採は必ず州政府の手で行う。盗伐が横行していたが、最近は警察の取締りも厳しくなり、白檀を扱う条件が良くなったので栽培する農家も増えて来た。今後白檀の生産量は増える見込みだが、世界中からの需要が供給の十倍以上あり、価格はまだ上がり続けるだろうとの事。

次に訪れたマイソールの郊外では、自生白檀をいくつも見ることが出来た。花が咲き、熟した赤い実もなっていた。これを乾燥させて皮を剥くと中から種が出てくる。この白檀の実をたくさん集め、日本への土産にした。デカン高原にあるマイソールは八月とはいえ、早朝は冷え込み、ホテルのドアーボーイは厚手のジャンパーにマフラーをしている。

マイソールの一二〇km西にあるバンディプール国立公園へ行く。しかし、前回訪問時にあった管理事務所の横の大きな数本の白檀の木は、やはり盗まれて姿を消していた。管理事務所の役人に白檀を見たいと申し出るが、なかなかOKを出してくれない。盗伐への警戒は厳しく、最近では車を道路わきに停車するだけでも注意をうけるらしい。やっと案内人を一人つけてくれ、二〇kmほど離れた森林保護区の中にある白檀の群生地に案内してくれた。車で四ー五〇〇mほど山を上ると、白い花の咲いた木が群生していた。案内人はこれも白檀だと言う。白檀に白い花があるのには驚いた。十五年以上も経った木は実をつけるような花を咲かせず、小さな白い花のようなものが咲くとの事。下の谷には直径三〇cm以上はある白檀が一面に生えている。盗まれずに残っているのは州政府によって厳重な警備のもと保護されているからだ。

バンガロールに戻り、白檀輸出業者から短い時間だったが、最新の情報をもらい、空港へ急ぐ。コーチン行きの便は双発のプロペラ機ですでに満席。一時間二十分の飛行だが、我々が最後の客であった。コーチンは海のシルクロードの中継地として古くから栄え、香辛料の街としても知られている。

ユダヤ教会の壁には、紀元前に初めてユダヤ人がコーチンにやって来た時のことが描かれてある。そして、ある絵の下には、この地が「Oud Ivory Cheek Spices」の国と呼ばれていたと書かれていた。アラビア語でOudは沈香のことである。香道で六国のひとつ"真那蛋"は、コーチンのあるマナバール海岸辺りで取れた沈香であると云われているが、今までどう考えても沈香と結びつかなかったが、この地方が紀元前からOudの国と呼ばれていた事がバイブルにも記載されている。長年の疑問がこれで解けた。

息子が体調を崩し手持ちの薬では効かず、インドの薬を飲ませる。インドで罹った病気はインドの薬が効くとの事。物の見事にすぐに効果が出た。マーケットには香辛料の店が並び、丁子、大茴香、桂皮、胡椒、唐辛子、ナツメッグなど、梅栄堂で使っている原料も山積みされている。

トリヴァンドラムへは椰子林の続く海岸線を南下して列車の旅。アラビア海に面したリゾートホテルに宿泊。移動に慌ただしい旅行であったが、最後にのんびりと体を休める事が出来た。インド最南端のコモリン岬に夕日を眺めに行き、ムンバイ経由でデリーへ戻る。トリヴァンドラムからデリーまで飛行時間だけでも四時間、インドが広大である事が実感できた。今回もインド人の名ガイド、カンナ氏のお陰で予定通り無事旅を終えることが出来た。〈終り〉

◀丁子・桂皮・大茴香等が並ぶ
コーチンの香辛料市場

ヒンズー教の祭り▶

待ち望む春に咲く、日本固有の花木

椿（ツバキ）

椿は日本原産の常緑広葉の花木。わが国の山野に自生するヤブツバキ（ヤマツバキ）とユキツバキの遺伝子が複雑に交じり合い、色々な種類が生まれました。一般的には、椿といえばヤブツバキをさしますが、現在、日本の椿の園芸品種は二千種類を超えると言われています。花は、一重咲き、八重咲きなどがあり、花色は、赤、白、ピンク、斑入りもありますが、最近では黄色の椿も誕生するなどバラエティーにとんでいます。

古くから貴族、僧侶などに親しまれた椿は、「古事記」や、「日本書紀」にも登場し、大伴家持が天武天皇に献上したとも伝えられています。

しかし、椿がいちやく注目を浴びるようになったのは、室町時代以降のこと。茶道、華道の出現が大きく関係しています。椿の凛として慎ましやかな風情は、特に茶人に好まれました。利休の僕だった侘助（わびすけ）が、利休のために苦心して創り上げたといわれる椿『侘助』は有名で、椿はその後ますます『茶席の花』として、重要な役割を果たすようになりました。

江戸時代に入ると、椿は鑑賞用として庶民からも愛される花になり、多くの品種が誕生したのもこの頃になってからです。やがて、日本の椿は宣教師カメルによってヨーロッパに紹介されました。彼の名を取って、学名ではカメリア・ジャポニカと呼ばれています。椿は欧米でも大ブームになり、品種改良が進み現在世界では六千種を超え、アメリカでは、カメリアとしてバラに並ぶほどの人気のある花になっています。

椿の文字は、漢字ではなく和文字ですが、"待ち望む春"に咲く椿への思いが伝わってくるようです。

●話題

ヤノ・ベンチャー・レポート

産業界における幅広いマーケティングを手がけている矢野経済研究所ですが、同社発行のヤノ・ベンチャー・レポート（二〇〇四・四）では、企画『ベンチャー企業経営者に聞く』ページで、『老舗企業』から『伝統産業ベンチャー』へ脱皮した企業として梅栄堂を取り上げました。また、「全では、お客様から教えてもらった。お客様の需要に合わせて技術を使う。伝統産業の『技』は守るのではなく、革新させて使うものなのだ。伝統産業といえどもイノベーションを怠ってはならない。」という中田社長のコメントが「今月のことば」として紹介されました。

新聞雑誌各誌で『一期香』が掲載

日経流通新聞（五月十一日）の第二弾の『一期香』に関するお客様の反応などについて、企画段階でのエピソードなどをまじえてお話させていただきました。また、ABCラジオ『宇野ひろみのおはようパートナー』、よみうりテレビ『大阪ほんわかテレビ』、朝日放送テレビの『ホップ　ステップ　シャンプー』でも、老舗メーカーのユニーク商品として、『残香飛』『一期香』が紹介されました。

TREND BOXでは「部屋の残り香にしても、洋服への移り香にしても、ソフトな香りが好まれる」ということで開発され、ヒットしたお線香『一期香』が掲載されました。また、よみうり新聞（五月十四日）、雑誌日経トレンディ等でも新しい発想のお線香として『一期香』が紹介されました。

番組インタビュー相次ぐ

コーヒーの香りのお線香『残香飛』のヒットに次いで、発売いたしましたイチゴの香りのお線香『一期香』について中田社長へのインタビューが相次ぎました。取材をいただいたのは、KBCラジオ『PAO－N（パオーン）』、山口放送ラジオ『HOT ZONEおはようKRY』、東北放送ラジオ『午後はおまかせ漢太のウキウキラジオ』など。それぞれ『残香飛』を発売するまでのイキサツや、

●商品紹介

お部屋に春の香り、お届けします。

一期香（いちごこう）

真っ赤に育ったイチゴの香りをお線香に閉じ込めました。

さわやかで、甘酸っぱい香りがお部屋に春を運んでくれます。

『一期香』は煙もひかえめ。日常の疲れやストレスがたまったときに、ぜひお試しください。

やさしいアロマに包まれた、極上のリラクゼーションタイムが始まります。

●標準小売価格　1,050円
（本体価格　1,000円）